



# 文学における女性と恐怖—ゴシックと犯罪小説—

人文科学系・言語文化学領域

中川 千帆

教授

NAKAGAWA Chiko

博士(文学)(アリゾナ州立大学)

■研究キーワード アメリカ文学,女性文学,ジェンダー,セクシュアリティ,ゴシック小説,ヴァンパイア,心霊主義,自己,家,犯罪小説

■主な所属学会 International Crime Fiction Association, International Gothic Association, 日本アメリカ文学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.745656dcbfd578de520e17560c007669.html>



研究者総覧

## 研究概要

女性の文学を中心に、ゴシック小説や犯罪小説を中心に研究しています。

授業ではアメリカ文学を中心に教えていますが、イギリスや日本の作品を研究対象とすることもあります。ゴシック・犯罪小説の2つのジャンルに共通するのは、女性の作家が最初から多く存在することです。それは同時に女性作家とその作品が軽視されてきたことも深く関わっています。私の研究は、文学的に高く評価されてこなかったジャンルにおいて、女性作家たちはどのような恐怖を作品中に描いているのか、その恐怖にどのように対処しているのか、そこにどんな政治的・社会的・文化的意味を読みとれるのかを考えることに主眼を置いています。

特に注目しているのは、ゴシック小説と犯罪小説に重要なテーマとなる「家」という空間です。「家」は歴史的に女性の空間とされてきました。小説中に描かれる家という空間をジェンダーと空間という視点に加え、女性ゴシック研究や建築・インテリアの歴史研究、そして哲学研究を用いて、リアリティがないとされる黄金時代の推理小説・犯罪小説においてどのように現実の女性の生が映し出されているかを考察しています。



ドラキュラ城のモデルともいわれるヴァイダフニャディ城



看護師探偵についての考察を収めた書籍



綾辻行人の館についての考察を収めた書籍

## 研究のプロセス・研究事例

——文学研究から読み解く娯楽小説・映画——

1. 女性探偵たちの活動領域——20世紀前半の「保守的な」犯罪小説においても女性探偵たちの活躍は描かれてきました。メアリ・ロバーツ・ラインハートが描いたミス・アダムズのように看護師、家庭教師などの他人の家庭に入ることができる女性の職業を持った彼女たちは、「女性らしさ」から逸脱しないまま、ジェンダーで制限された境界線を越えていきます。
2. 少女探偵たちの冒険が示すこと——探偵小説の黄金時代とほぼ時を同じくして、ナンシー・ドリューやジュディ・ボルトンという少女探偵シリーズが20世紀前半のアメリカで描かれ始めます。「少女らしさ」に制限されない探偵である彼女たちにも、「家」の内、特に屋根裏は事件において重要なカギを持つ場所です。彼女たちは「よい子」のまま、外の世界で出ていくことのできるポータルを見つけるのです。
3. ヴァンパイアロマンスと少女たちの願望——『ドラキュラ』で完成したヴァンパイア像は、21世紀に入りロマンスの語りの中で謎めいて魅力的なヒーローとなりました。『トワイライト』のエドワードは、もはや危険でもおぞましいものでもありません。安全で優しいヴァンパイア・ヒーローが生まれたのは、ジェンダー間の関係が大きな変化のためというより、むしろジェンダー間の関係に対する想定が変化したためだといえます。
4. 幽霊屋敷物語映画が描く家族——ゴシック小説が映画において受け継がれた伝統の一つが、『シャイニング』等をはじめとする幽霊屋敷映画です。20世紀後半のアメリカにおいては、それは「家」という空間の経済的・社会的な意味を巡って家族関係を検証するものとなりました。